

Wú xìn bú lì
无 信 不 立

信無くんば立たず (顔淵第十二)

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



顔回、子路をはじめ『論語』には個性的な人物が数多く登場しますが、中でも異彩を放っているのは子貢です。子貢は雄弁家として知られていました。商才にたけていたとも言われています。雄弁家だけあって何度も孔子に議論を挑んでいます。『論語』に次のようなやり取りがあります。ある時、子貢が政治について孔子に質問しました。「子貢問政 (Zǐ gōng wèn zhèng)。(子貢政を問う)〈顔淵第十二〉。孔子は即座に答えました。「足食、足兵、民信之矣 (Zú shí, zú bīng, mǐn xìn zhī yǐ)。(食を足し、兵を足し、民をして之を信ぜしむ)。それは食糧と兵力を十分に蓄え、民から信頼を得ることだ、と。子貢はさらに質します。「必不得已而去、於斯三者何先? (Bì bù dé yǐ ér qù, yú sī sān zhě hé xiān?)」(必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて何れをか先にせん)。食糧、兵力、民の信頼、この三者のうち、やむを得ず一つを切り捨てるとすれば、どれを先にしますか、と。すると孔子は、「去兵 (Qù bīng)。(兵を去らん)、と答えました。

孔子が活躍したのは春秋時代、天下大乱の時でした。各国の君主たちは競って富国強兵に励んでいました。兵力がなければ国は滅びるしかありません。かつて魯の国のトップリーダーを務めたことのある孔子は、そのことを十分すぎるほど知っていたはずですが。時代を考えれば、常識的にはあり得ない選択ですが、孔子は兵の切り捨てを選びました。この三者はいずれも一国の政治にとって不可欠のものですが、削除の対象を敢えてこの中から選ぶとすれば、兵力を選ぶ以外にないと考え

たわけです。おそらく、兵力は他の二者を守るための手段の一つであって、この二者を捨ててまで保持すべきものではないということなのでしょう。ここに平和主義者としての孔子の真骨頂を見ることができます。

孔子を師と仰ぐ普通の弟子ならば、これで納得するはずですが、雄弁家を以て鳴る子貢は簡単には引き下がりません。「必ず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて何れをか先にせん」と、さらに孔子を追い詰めます。「斯の二者」とは言うまでもなく、「食」と「信」です。食糧と民の信頼、やむを得ず切り捨てるとすれば、この二つのうちのどちらにしますか、というわけです。並の先生なら、こんな意地悪な質問をされると答えに窮するでしょう。「バカな質問はよせ」と言って怒り出すかもしれません。ところが孔子は迷いません。その答えは「去食 (Qù shí)。(食を去らん) でした。そしてさらに続けます。「自古皆有死、民无信不立 (Zì gǔ jiē yǒu sǐ, mǐn wú xìn bú lì)。(古より皆死有り、民信無くんば立たず)。人はみな死ぬものと昔から決まっている。しかし政治に対する信頼がなければ、民はやっていけない。

人類は昔から飢饉や災害に悩まされてきました。今もそれは基本的には変わりません。政治の力で救える死もあれば、救えない死も確かにあります。しかし何れの場合でも政治にとって大事なものは、民の信頼を得ることです。これを後まわしにしての軍備の増強などは、もつての外ということでしょうか。